釣れ釣れなるままに

２０１０年思い出の釣行記 PART.　１

未練はあるが

鹿島釣狂

岩見沢釣遊会第１回大会

☆開 催 日	平成２２年４月１８日			
☆開催場所	須築港～瀬棚港			
☆入釣場所	梅花都平盤			
☆釣　　果	アブラコ	４００	㎜	１／１
	ホッケ	３８２	㎜	３／６
	カジカ	３５０	㎜	１／２
	重量	３００	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１０８２	点（２魚種身長＋５匹重量）	
	成績	４	位	

未練はあるが悔いはない

昭和４７年４月、まだ雪の残る、ぬかるんだ狭い山道を登り切った峠で、小盆地の中心にある廃校のような赴任先の職場が見えた。職につく喜びと不安が交錯して何故だか涙が止まらなかった。その後、３８年間を空知管内の８市町１０の職場を転々としながら、今年、その職に終止符を打った。それぞれの地域の方々、そしてよき先輩や同僚とのたくさんの出会いの中で自分を成長させてもらってきた。

最後の赴任地の職務室に「終わりに悔やまず、始めの心、忘るべからず」と書かれた額が掛けられていた。以前、先輩が冒頭の言葉「未練はあるが悔いはない」と退職していったことが思い出される。無我夢中で突っ走ってきた３８年間だったが、自分は心の底からそう言うことが出来るだろうか疑問である。

退職後は悠々自適の釣り三昧といきたいところだが､私の年代から年金満額支給が６５歳となっている。私としては細々と暮らしながらでも食いつないでいきたところだが、「何もしないと人間が駄目になってしまう。」と女房が宣う。また、身近にもそういう先輩をみてきた。やはり何か仕事に就かなければならないだろう。

幸い、職員が３名の小さな職場に再就職することが出来た。施設の維持・管理が主で、建造物の営繕からはじまり花壇の手入れや草刈りが仕事のようなものだ。頭を使うより体を使うほうが性に合っている自分としては気楽なのだが・・・。しかし、出勤時刻によって弁当を持っていかなくてはならなかったり、午後からのんびり出勤したりで、毎日の計画が立たない。勤務時間は短いのだが、不規則でしかも土曜日にも組み込まれている。公休は日曜・祭日のみで、土・日を利用しての釣行は難しそうだ。夕方出発して朝方帰ってくる近間のパターンが主になるだろう。一日中たっぷり働き、休みもたっぷりで釣りにも行きたいというのが願いなのだが・・・。

最後の引越

岩見沢市に居を構えたのが２０年前。６年間は家族と一緒に暮らしたが、その後自宅を離れての単身赴任生活が６年間。息子や娘が独立して女房とともに赴任先での借家生活が８年間。ようやく自分の居に戻ることが出来た。

３月３１日、無事３８年間の勤めを終えて自宅に戻ると図らずも女房が花束で迎えてくれた。なんだか緊張の糸が切れて涙が止めどもなく溢れてきた。

新築当初、私が利用していた書斎が単身赴任の間に息子に乗っ取られていたので、まずは息子が放置していった荷物を整理する。息子も娘も我が家を物置と勘違いしている節がある。何とか書斎にパソコンを設置したが、息子の机を利用することとなった。私が愛用していた机と入れ替えたいところだが、息子の机が書斎の狭い入り口を通らない。どのように入れたのだろう。一事が万事そういう状況なのだ。女房などは、古くからの私の遺物を見つけてしまって、狭い書斎にこっそりと置いていく。その遺物が詰まった段ボールを開けてしまうと、過去の記憶が呼び戻り、ついつい読みふけってしまい、瞬く間に時が過ぎてしまう。「北海道のつり」だけは書斎に運び込み本棚に格納した。

あれこれと悩みながら引っ越し荷物を片付けていると、大前事務局長から釣り大会参加の確認の電話が入った。今年度の大会日程は、引っ越し早々、女房にも見えるようにとカレンダーにデカデカと書き込んである。予め分かっていたことだから、引っ越し前から４月の大会にむけて準備を整えていたのだが、その肝心な釣り道具が引っ越し荷物に紛れ込んで行方不明になっていた。

２世帯分の荷物がどの部屋からもあふれている。ベッドやソファー等の家具類は友人やリサイクル屋さんに引き取ってもらったり、古いものは粗大ゴミとして捨てたりしたが、思い出のあるものは捨てきれないでいたのだ。

ミンククジラ

さあ、いよいよ今年の幕開けである。昨年の年間覇者として無様な成績では終わらせたくない。引っ越し荷物の奥の方から釣り道具を引っ張りだして準備は曲がりなりにでも整えた。

今年は、エサに凝ってみようと思う。生鮮市場で一昨日、下見しておいたエサを物色する。鶏のハート、牛肉のコマ落とし、クジラを購入してみる。しかし、一昨日陳列されてあった根室産と表示された真っ赤なホヤがない。一度だけ使ったことがあるホヤはダイダ

イ色の宮城産で効果があるとは思えなかった。仲間の堀内氏が合い掛けとして使用しているのは北海道産の真っ赤なものだ。今回、試してみようと思ったが叶わなかった。

クジラはミンククジラと表示されたもので、調査捕鯨で陸揚げされたものだ。高価ではあるが、時には私たち庶民の食卓を飾ることもある。そのクジラが過激な動物愛護団体の標的にされ日本がやり玉に挙げられているのだ。捕鯨船の周りをシー・シェパードと呼ばれている海賊まがいの輩が妨害行為を繰り広げる。船で体当たりをしたり、薬品入りのボトルを投げ込んだり、船に乗り込んできたりしているのだ。日本政府もなっていない。日本の食文化を守ると毅然としていればよいのだが、諸外国の顔色ばかりを窺っている。外交がなっていないのだ。政権交代後はなおさらで、外務省の官僚が仕事をさぼっているようにしか思えない。政治主導といえども、官僚に仕事させないでどうするつもりだろう。政治家が国の行く末を定め、官僚がその後方支援をするのが職務であろう。何か履き違えているような気がするのは私だけだろうか。

農作物の高騰に至っては、当時の赤松農林大臣が、「妻が『最近野菜が高騰してきたので困っている』と言っていた」と記者会見で話したものだから、庶民の生活を知らないとヤリ玉に上げられた。私でさえ何を脳天気なことをいっているのかと批判したくもなる。要するに主体性がないのだ。日本の農業をどのようにしていったらよいのかという展望を示してくれないのである。「夏野菜を早く出荷しよう。ハネ品も市場に出そう」といっている脳天気さである。クジラからあらぬ方向に脱線してしまった。話を戻そう。

砂漠の水

午後６時までの勤務を終えて自宅に駆けつけ着替えをし、気も漫ろで夕飯を掻っ込む。予め準備しておいた荷物を車に積み込み集合場所へと向かった。事務局長からは７時までには集まるようにと念を押されていたのだ。バスは到着しており、荷物を移し替えて乗り込んだ。早速、今年１年の健闘を誓い合って仲間と酒を酌み交わす。

隣の座席は大内氏だった。彼は、白岩舟入澗についた離れ岩に乗る予定だという。昨年、谷口、山岸氏が島歌川に入って不調だったために、朝方移動していい思いをしたところである。私も一度は乗ってみたいと思っていた岩である。川原氏も梅花都に乗りたい平盤があったのだが西川氏と競合しており、遠慮して白岩に入るようだ。

釣り場の選定は仲間といえども牽制せざるを得ない。私は、昨年初めて入って優勝した梅花都を候補にしていたが、前野、嵐氏の話から似たようなコースを選んでいることが伝わってくる。結局、私は、梅花都平盤の左先端に決定した。昨年は波が高くて入釣を断念したところだ。エンカマなどはなく、今日はべた凪なので注意さえすれば簡単に出られるということだ。

梅花都で嵐、前野、そして私の３人が下りた。嵐氏はバスが来た方向に戻り、前野氏は予定通りの盤に出るという。舟揚場に一旦リュックを置いて竿袋だけを担いで、ストックを突きながら進むと何とか狙いの先端に出ることが出来た。釣り場は方形の平らなコンク

リートが３個続いている所で、あずましい釣りが出来そうだ。竿を設置してから、再度荷物を取りに戻り担ぎなおして準備万端整った。

用意した様々なエサを付けて振り込み終える。しかし、竿先は平穏なままに時が過ぎていく。２時間ほどエサをとっかえひっかえ様々なところに打ち返したが竿がピクリともしない。そのうちに寒さで手がかじかんでいうことを利かず、打ち返しが緩慢になってくる。この寒さでは魚の活性も上がっていないと思われる。舟揚場付近に入った前野氏の偵察にいくと、アブラコにカジカ、アカハラをゲットし、規定の５尾を揃えていた。魚は口を使っているのだ。

少しは希望が出てきて釣り場に戻る。すると溝に打ち込んでおいた竿がモゾモゾと怪しげな動きをする。小カジカでも釣れたかと竿を煽ると、結構な引き込みで４０㎝程のアブラコがあがった

それにしても寒い。白いものも舞い降りてきたのでジャンパーの襟を立てようとファスナーを引っ張り上げると、取っ手がとれてしまった。おまけに無理したものだからファスナーの用を足さなくなった。３０年も前に買ったスキーウエア―なのだが、釣り用におろすことを躊躇する程に格好がよくて気に入っていたものだ。前開きの状態で使うことになり余計に寒さが身にしみる。中に綿のついた作業用のゴム手をはいているのだが、手袋を脱いでコマセやゴロを掴んだ手を海水につけたくないので、ゴム手の中がドロドロになってくる。

小便がしたくなった。ジャンパーは前開きなので便利だが、手がしばれてしまっていうことが利かない。胴長からようやく貧弱な一物を引っ張り出したところで待ち構えていたように尿がほとばしり出た。そして、その生温かいものをかじかむ手にジョボジョボと最後の１滴までかけて温めた。ふと、砂漠で飲み水を無くした旅人の光景を思い浮かべてしまった。

３本の竿を粘り強く打ち込む。ローソクボッケがきたが、釣りものが少なく大事にしまい込む。少しまともなホッケ３５㎝があがった。小さなアタリはあるのだが食い込まないので放置していた竿をあげてみると２５㎝程のカジカだった。

薄日が差し込んできて、本日最長となるはずの４０㎝強のホッケが釣れてようやく規定の５尾がそろった。更に３５㎝ほどのカジカもあがった。

秘密のマゾイとエコ

上がりの１時間前には竿を片付けて、早々に国道にあがった。婿のホッケ、嫁のアブラコにカジカ、残りのホッケをプラスしておく。審査会場で審査用袋に詰め替えようとすると婿に予定していたホッケが見あたらないので５尾目になる小さなホッケを追加して審査に提出した。家に戻ってから確認してみると、婿にしようと考えていたホッケがリュックの底のほうに紛れ込み雲隠れしていたのだ。

審査結果

優　　勝	嵐　光博	１１７３点	（アブラコ３９１㎜+ホッケ　３８０㎜+４０２０ｇ）	中　　歌
準 優 勝	荻野一利	１１４５点	（ホッケ　４０１㎜+カジカ　３７２㎜+３７２０ｇ）	切　　梶
３　　位	矢根正仁	１１０５点	（ホッケ　４０９㎜+アブラコ３９６㎜+３０００ｇ）	弁 天 岬
４　　位	鹿島釣狂	１０８２点	（アブラコ４００㎜+ホッケ　３８２㎜+３０００ｇ）	梅 花 都
５　　位	桑原　理	１０７１点	（ホッケ　３８５㎜+カジカ　３７８㎜+３０８０ｇ）	横　　滝
身長優勝	谷口良幸	１０６０点	（クロガシラ４４０㎜+ホッケ３６０㎜+２６００ｇ）	中　　歌

審査結果は、一緒に下りた嵐氏が中歌方面に戻ってアブラコを揃えて優勝した。準優勝は切梶でカジカを拾い釣りしながら歩いた荻野氏である。身長優勝は中歌で４４㎝のクロガシラを釣り上げた谷口氏だった。

「何だ！この木っ端ガレイは誰が釣ったんだ？」

「いないいない、ばぁ。それは私、谷口です。これを木っ端ガレイとは言わないでしょう。私にとっては手の平のようなもんですが・・・」

帰路は寿都温泉「ゆべつの湯」で昼食をとった。「ゆらり　ゆったり　ゆべつのゆ」の看板に誘われて風呂に浸かりたいところだが、食事だけだという。温泉を出たところに「漁師の直売所」の幟があったので覗いてみると、旨そうなクロゾイ、ガヤ、ウスメバル、ホッケ等が並べてあった。大会後はいつも自分の釣った魚の処理に手を焼いているにもかかわらず、ついついマゾイに手が出てしまった。それでもって冒頭写真は今回の全釣果ではない。翌日は午後勤務だったので午前中に魚の処理をした。マゾイとアブラコを刺身にして昆布で締めてみると、食感は違うのだがどちらも似たような味になってしまった。

退職したので、コマセを持ち帰り冷凍保存することにした。海で処理していたモノをエコに徹して再利用することにしたのである。余ったイカゴロを余ったコマセに絞り出した。身エサも全部持ち帰り、骨や皮を取り除いてから出刃で叩いてコマセに混ぜこんだ。それを冷蔵庫に付いた冷凍室に入れようとするのだが入りきらない。

コマセやエサを保存するために専用の冷凍庫がほしい。今までは釣った獲物は隣近所にもらっていただいていたが、これからは自分のために保存しておく必要も出てくるだろう。しかし、そんなことを考えるとはたしてエコになっているのだろうか疑問である。

以前、エサづくりで出た魚のアラをコマセに混ぜ込もうという魂胆でミキサーを購入し、喜び勇んで丸カツオの頭部をそのままミキサーに入れたことがある。すると、ミキサーがガタガタと音を出して止まり、モーター部分から煙が出てきてしまった。冷凍物や硬いものはミキサーにかけることが出来なかったのである。エコといいながら様々なものに手を出して、結局は余計な出費を重ねているというのが現状である。

来月は、寿都港～千早港である。もう一度弁慶岬で釣りをしたいと思っている。過去に１度だけ入釣したことがあるがその時に優勝したのだ。この歳であの険しい道のりを踏破することが出来るのだろうか。昨年、見逃した歌島大盤にでも行ってみようか・・・。